

醜い身体—日本中世仏教絵画における病と死

共立女子大学 山本聡美

中世初頭の日本で制作された絵巻、「病草紙^{やまいのそうし}」と「九相図巻^{くそうずかん}」。このうち「病草紙」（平安時代末期、京都国立博物館他蔵）は、病気を主題にした絵巻で、断簡となって21場面が現存する。一方の「九相図巻」（鎌倉時代、九州国立博物館蔵）は、女性の死体が腐敗する様子を九つの相に分けて描く。これらの絵巻では、身体、そして死体が、宮廷絵師の関与が推定される卓越した描写で、徹底的に醜く不浄なものとして描き出されている。その制作背景には、病や死をめぐる仏教教義によって構築された世界観がある。

1) 病と死をめぐる経説

「病草紙」の詞書と絵の基本的な構造は、仏教的な因果応報観に基づく。仏教には、善悪の行いが必ず相応の報いをもたらすという、因果律の思想があり、そこには、病や身体の奇形を自らの悪行の報いとする考え方が含まれる。これは、輪廻転生の思想とも結びつき、病の原因を前世の悪行に求める観念にもつながった。また「九相図巻」も、その源流は、出家者が自他の肉体に対する執着を断ち切るために、その不浄の様子を思い浮かべる、九相観^{くそうかん}という修行にある。すなわち、これらの図像は、仏教教義に依拠して成立したものである。

2) 説話化される身体

ただし、詞書や画面内容には、経説の単純なる翻案とは見なせない要素も多々ある。例えば「病草紙」では、病者の職業を、経典の内容を超えて「占い師」「金貸し」「乞食法師」などと規定する。そこには、病を社会の周縁部に位置付け、絵巻の外部の鑑賞者、つまり高位の貴族である自らとは峻別しようとする思考が看取される。また「九相図巻」にも説話からの影響が色濃い。中世末期から近世の日本では、女性の死体をめぐる多様な説話が語り継がれ、それは単なる男性の発心譚としてだけではなく、不浄の身を自覚する、気高く信仰心に篤い女性の物語としても理解される土壌が存在していた。「九相図巻」にも、肉体への執着を断ち切るという本来の機能に加え、女人教化の図像としての役割があったのではないだろうか。説話化という過程を経ることで、病と死体の図像が、仏教の教義を超えて、より実践的でより切実な「正しく生きるための方法」を語り始める回路が開かれ、そしてそれは、ダークサイドを契機とした救済の思想へと接続されていく。

3) 救済の回路としてのダークサイド

説話化という過程を経た病、そして死体の図像が、中世日本でどのような機能を発揮したのか、ここでは二つの具体的例を紹介する。

14世紀初頭に制作された「玄奘三蔵絵」（藤田美術館蔵）巻12に、玄奘三蔵の葬儀に際して、唐の皇帝が施主となって身分の上下に関わらず施しを行った、無遮会の場面が描かれている。施しを求めて集まる人々の姿は、芸能者や不具、奇形の者たちが混然一体となって描かれており、それは「病草紙」の世界観とも通じる。この場面では、為政者による救済が遍く世に満ちることの象徴として、病者や不具者の図像が用いられているのである。

また、京都の醍醐寺には、後白河上皇第六皇女の宣陽門院^{せんやうもん}（1182～1252）によって、貞応二年（1223）

に建立された^{えんまどう}焰魔堂が、室町時代半ばまで存在していた。この堂の外壁に九相図が描かれていたことが、諸史料によって知られる。中世の不浄観説話を踏まえてその意味を解釈するならば、堂外の壁画、すなわち衆人の目に晒される場所に描かれた九相図には、願主である宣陽門院自身の姿が重ね合わせられていたと考えることができる。自らの不浄の姿を晒し他者の発心を促すことで、自分自身の信仰の機縁とする。女人教化、女人救済の図像としての中世九相図のありようが、そこから浮かび上がってくる。